

顔ハメ講談『怪談！お岩の顔ハメ』

■登場人物

①賀茂忠・・・かもただし。40歳男。国語教師。骨董好き。怪談好き。とくに四谷怪談のお岩さんが憧れの人で惚れている。

②賀茂吉子・・・かもよしこ。34歳女。賀茂忠の妻。夫の骨董趣味に理解がない。パートで働いている。ぼちぼち子供が欲しい。

③骨董・よろず屋「鶴屋」のご主人

ひよんなことから四谷怪談・お岩の顔ハメ看板を手に入れた。絵が得意。安倍晴明の母・葛ノ葉が好き。

■あらすじ

①賀茂忠が四天王寺の骨董市に遊びに行く。そこで骨董屋の「鶴屋」が出店をやっていた。見ると「四谷怪談」のお岩さんの顔ハメ看板を発見する。鶴屋の主人がいうには「これは『呪いの顔ハメ看板』で、昔、ある小劇団が四谷怪談をやるので、客寄せのために顔ハメ看板を作った。ところが、これに顔をハメると、よからぬことが起こった。なぜか顔にお岩さんのような疱瘡ができてしまう」「絶対にはめてはいけないという顔ハメ看板」だという。忠は、しかし、「それはおもしろいかな」と買う。じつは四谷怪談が大好きで、しかもお岩さんが大好き。あの顔をはじめてみたときにドキドキした。恋に落ちた。

鶴屋「あんさん、ヘンな趣味してまんな」

忠「お岩さんのような超絶世の美女の顔が崩れていくところ。そこに、わび・さびを感じますがな。もののあはれ」

鶴屋「ようわからんわ。まあ、買うてもええですが、保障しませんで。顔ハメしたらどな

いな目にあうかわかりませんで」

②忠、顔ハメ看板を買って帰宅。妻の吉子に顔ハメしてくれへんか？という。嫁は「顔ハメ看板？またつまらんもん買ってきて！」とケンカする。一向にはめてくれない。

忠「はめさしてくれ！」

吉子「いやです！」

忠「さきっぽだけでええから！」

吉子「そなんんいうて、結局、ぜんぶはめるんやんか！」

結局、寝てる最中に忠は吉子の顔にお岩の看板をハメることにした。すると、不思議なことに、みるみる顔に疱疹ができてしまう。忠は興奮して、嫁の寝込みを襲う。

吉子「なんなのよ！」と最初は抵抗するが、嫌いではない。

忠「ええやないか」

吉子「なによ」

忠「さきっぽだけでええから」

吉子「ええ？さきっぽだけでええの？」

いつのまにかイチャイチャしはじめて、そのままズルズルと愛しあう。一戦まじえてぐっすり寝る。

③翌朝、嫁が大絶叫！鏡をみて、自分の顔がお岩さんみたいになっているのをみてパニックを起こす。

忠「かわいいがな」

吉子「どこがや?!」

忠「茶器でも最高級の茶器はかけているのがええねん」

吉子「ふざけんといて!なんでこんな顔に?!なにをしたんよ!!」

忠「じつは…」とお岩顔ハメのことを説明する。嫁、大激怒!

嫁「なんとかして!こんな顔やったら買物もいかれへん!」

忠「そんなんいわれても・・・ああ!そんな不気味な顔で怒ってるのがまた怖くていい」

と火に油を注ぐ。

④結局、忠と吉子は骨董市に行く。骨董屋「鶴屋」の主人を見つけてカクカクシカジカ。

忠「どないしたら治るんや?」

鶴屋「だから、ハメたらアカンといいましたやんか!」

吉子「ヘンなものを売りつけて!なんとかして!なんとかしないと化けてでてやる!」

鶴屋「もう化けてますがな」

吉子「なんですって~!」

忠「その怒ってる顔がまた可愛い!!」

鶴屋、名案を思いつく。

鶴屋「そうや!お稲荷さんの顔ハメ看板を作ればいいのです!」。そして四谷怪談の話をする。お岩さんは結局、自分を裏切った夫・田宮伊右衛門のみならず、一族・関係者全員を呪い殺してしまった。しかし、その後、祟りを恐れた民衆が、お岩さんの家の跡地にお稲荷さんを勧請して、それで祟りがなくなった。

鶴屋「お岩さんの顔ハメでそうなったんやから、稲荷さんの顔ハメにハメれば元に戻るはず！」

吉子「それは名案！どこにそのお稲荷さんの顔ハメはあるの！？」

鶴屋「そんなんありまへん」

吉子「じゃあ、作ってください！」

鶴屋「え！？」

吉子「でないとい呪い殺してやるから！！」

鶴屋「わかりました！なんとかします」

忠「そのままでええのに・・・」

吉子「なんかいった！？」

結局、鶴屋がお稲荷さんの顔ハメ看板を作ることに。鶴屋「なんでこんなことをせなあかんねや」とぼやきながらも、作っているとだんだんと興が乗ってくる。「どうせなら美人なお稲荷さんがいいなあ。そや。安倍晴明伝の葛の葉にしよう。安倍晴明の母親の葛の葉は、じつは白狐が化けてるんや。結局、狐やというのがばれて、和泉の信太の森に帰ってしまう。我が子の晴明にいうんやな。『恋しくば訪ね来てみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉』。泣かせるええ話や」とかなんとかいいながら、大好きな白狐の葛の葉をモチーフにした顔ハメ看板を作る。

⑤鶴屋が顔ハメ看板をもって、賀茂家に行く。いよいよ嫁が稲荷さんの顔ハメに顔をハメる。

忠「もうこの顔ともおさらばか。悲しい」

吉子「やっと元に戻れる！」

そして顔をハメると・・・ピカー！っと光って、なんと吉子は「狐」の顔になってしまった。

吉子「なんなんこれ！」

忠「なんで狐に?!」

鶴屋「おお！美しい。素晴らしい」。

忠「これならお岩の顔ハメの方がええわ！」

鶴屋「いやいや！葛の葉でええやないですか！狐顔の美人」

忠「狐顔というか狐やがな！」。

吉子、ブチギレ。吉子「もうあんたらとはやってられん！ひとりになりたい！森にいきます！」

忠と鶴屋「まってくれ！」

吉子「恋しくば 訪ねきてみよ お岩なる 顔ハメ看板 恨み葛の葉。コーン！」

こうして吉子は狐になっていずこへと去っていきました。その後の行方はようとして知らなかったそうです。また不思議なことには、吉子がいなくなると同時に例の「お岩の顔ハメ」も行方不明になったそうです。もしかしたら「これ以上、私のような犠牲者が出ないように…」と吉子がどこかに顔ハメ看板を持っていったのかも知れません。もし街角で「お岩の顔ハメ」を見つけても不用意にハメないほうがいいかも知れません。また祟りが起こるといけませんから・・・というわけで『怪談！お岩の顔ハメ』の一席でございました。